

(様式第3号)

平成20年度調査研究中間報告書

調査研究課題	子宮頸癌の新しい診断法の開発に関する研究
計画期間	平成19年度～21年度 3年間
調査研究計画	<ol style="list-style-type: none">1 少数の試料を用いてパイロット・スタディを行い、癌組織に特徴的な発現の仕方を示す複数のバイオマーカー候補を選別する。2 多数の臨床サンプルを用いてバリデーション・スタディを行い、バイオマーカー候補の検証を行う。その中から、最も感度と特異度の高い蛋白質をバイオマーカーとして選定し、同定する。3 同定された蛋白質をもとに抗原及び抗体を作成し、組織アレイを用いて臓器特異性を検討する。 <p>共同研究者 西田正人 独立行政法人国立病院機構 霞ヶ浦医療センター院長 石渡 勇 石渡産婦人科病院長 本多 彰 東京医科大学霞ヶ浦病院助教授</p>
進捗状況	<p>次の試料からタンパク質を抽出し、ペプチドに断片化した。その後、LC/MS/MSで分析し、その情報についてデータベース検索を行い、タンパク質を同定した。</p> <ol style="list-style-type: none">1 市販の凍結組織試料（浸潤癌部，非癌部の8組）2 共同研究施設で保管されている浸潤癌のホルマリン固定パラフィン包埋（FFPE）の病理標本から分取した浸潤癌，上皮内癌，正常部の各細胞
これまでの成果の概要	<p>浸潤癌組織において非癌部に比べ特異的に発現の増加しているタンパク質を同定した。8例中7例の癌組織中に共通して発現の増加しているタンパク質を2種類，8例中6例の癌組織中で発現の増加しているタンパク質を9種類見いだした。</p> <p>8例中7例の癌組織中に共通して発現が増加しているタンパク質の1つは分子量約100kダルトンであり，FFPE標本の上皮内癌細胞中にも検出され，発癌予知マーカー候補として期待される。</p>
今後の計画・課題対応方法	<p>上記タンパク質について免疫組織化学染色と遺伝子発現解析で追加試験を行い，癌組織で発現が亢進していることを検証する。</p> <p>同定された他のタンパク質についても同様の実験を進めていく予定である。</p>